第１３回

日中禅僧交換交流
報 告 書

２０１９年8月２８日～9月5日

主催　日中韓国際仏教交流協議会
　　日中臨黄友好交流協会
　　大本山永平寺

滞在寺院

江蘇省揚州市大明寺および鎮江市金山寺

期間

2019 年 8 月 28 日(水)～9 月 5 日(木)　9 日間

滞在日程

8/28(水)	関西国際空港発 10:10（JL891）　上海浦東空港着 11:45 空港で中国仏教協会・劉会敬氏、滞在寺院関係者らが出迎え
8/29(木)～ 9/ 4(水)	各寺院において修行体験
9/ 5(木)	上海浦東空港発　13:15（JL894）　関西国際空港着 16:45 着後解散

参加者名

阪上　宗英（臨済宗天龍寺派臨川寺）

五十嵐　祖真（臨済宗妙心寺派瑞泉寺専門道場）

和田　徹生（大本山永平寺）

川浦　詳元（大本山永平寺）

金山寺にて

日中禅僧交換交流を終えて

臨川寺　坂上　宗英

第 13 回目を迎えた日中禅僧交流、この春にお話をいただいた時は失礼ながらその存在も知らないままに、8 月 28 日から 9 月 5 日まで中国の寺院にて法師（僧侶）の方々と寝食を共にさせていただきました。大明寺、金山寺、高旻寺、定慧寺、隆昌寺の皆様には温かく日本の僧侶 4 名を迎え入れていただいたことを感謝申し上げます。

まず、簡単にではございますが、この交流会が始まるきっかけについてです。中国の仏教協会の会長も務められ、中国仏教界の主要指導者でもあった趙樸初先生。1993 年、仏教協会の記念活動として訪日され、韓国の代表と会議に出席されました。そのご挨拶には「中、日、韓、三国の仏教文化は私たちの三国国民の黄金の絆であり、この絆を大切に守り、引き続き発展させなければなりません。」とあります。この友好交流の発展の構想に、韓日が賛同し、1995 年には三国間の友好交流会議が北京にて開かれ、1998 年、第一回体験交流の運びとなりました。そして今日までの関係が築かれております。

交流を終えて非常に興味深かったことは、法師となるまでの過程です。昨今の日本では大半の僧侶は寺院に生まれその家督を継いでいくような形になってきております。僧侶の妻帯がある程度認められていることはもちろん、在家の方は社会全体が裕福になることで仏門を叩かれることは少なくなった。僧侶の日常底のあり方からの不信感など、教義というより人としての在り方についての疑問からその道を閉ざしてしまわれることも多いのではないかと思います。また、宗派間の交流も少なく、私を含め若年層の僧侶は他宗派の実態を知らないということはよくあることと考えております。実際に今回、曹洞宗永平寺の修行僧二名とも中国での生活を共にし、お互いの規矩の相違に刺激をいただけた部分もあります。中国では戒を授かる前に浄人として寺院での生活をされるのが一般的であると聞きました。修行の生活はもちろんのこと、捉金銀宝戒のような金銭を所有しない戒を受けた法師のためにそういったものの管理までされるそうです。師匠の認めがある浄人は三壇大戒、小乗戒の沙弥戒、比丘大戒、大乗戒の菩薩大戒をおよそ 1 ヶ月で受けられます。そして、5 年ほど仏学院にて戒律などについて学ばれます。

特徴的だと思ったのは、大乗の宗派が中国では華厳宗、法華宗、三論宗、法相宗、禅宗、浄土宗、律宗、密宗と八宗あり、その全てを学んでいかれるところです。学院での生活を終えるとそれぞれがどの宗派で修行をするか選択し、師匠もまたその選んだ道を尊重されるそうです。

ある法師さんが宗派間によって違いはあれども元来は一つ、お釈迦様の教え、只々、諸悪莫作、衆善奉行だとおっしゃったことが印象深いです。中日どちらかの仏教にしろ、戒律に雁字搦めになって逆に心の自由まで奪われたのならば、本来の意味からかけ離れてしまうと思います。しかし、日本の僧侶がもう少し節度をもって真摯に向き合っていくこと

の必要性も感じられました。一休さんのような破戒の僧が日本では良く知られていますが、破戒ができるということはしっかりと持戒されていたからでもあると思います。持戒無き破戒はただの無明であり、自分だけが暗闇の中を彷徨っているようなものかもしれません。大乗の船の船頭でもある僧侶が道に明るくないと、皆を迷わせることは言うまでもありません。よく自分にも言い聞かせたいところです。

朝課（大明寺）

他にも、中日間で大きな違いを感じたのは僧侶と信者の距離感についてです。法師と信者が寺院で共に生活し、心を自然と通わせているように見えました。悩みがあると法師の一言で心が本当に清々しくなるということを何度も耳にしました。高いところから見下ろすと言うことではなく、同じ場所で同じ人として、同じ仏心を持つものとして悩みを共有していく。そこには大慈悲心が現前しておりました。

20 年近く続く日中禅僧の交流、これからもより長く、そしてより深いものとなり、黄金のように輝き続け、固い絆となることを念願しております。中国でお世話になった寺院様方、仏教協会、日本の関係寺院、協会の皆様にはこのような機会を与えて下さったことに感謝の意を表し、一僧侶として、一人間としてより一層精進を重ねてまいる所存です。

風月同天　～ 日中禅僧交換交流に参加して ～

大本山永平寺　　和田 徹生

8 月 28 日、上海浦東空港より車で５時間ほど北上し、夜の 7 時を過ぎた頃、江蘇省揚州市に入った。しばらく車窓を眺めていると、遠くに煌びやかにライトアップされた高い塔が見えてきた。今回の研修先の一つである大明寺の「棲霊塔」であり、揚州市が誇る観光名所となっている。

大明寺は鑑真ゆかりの律宗の寺院である。揚州に生まれた鑑真は、日本へ渡航する以前は大明寺に住して戒律を講じて広く名声を得ていた。日中国交正常化の翌年の 1973 年、奈良唐招提寺の金堂を模した「鑑真記念堂」が建立され、1980 年には、唐招提寺の有名な鑑真像が大明寺に里帰りし、さらに 2003 年には、鑑真が招来したと言われる唐招提寺の仏舎利が前述の棲霊塔に安置される等、積極的な唐招提寺との交流が見られる寺院である。ま

た、大明寺には鑑真学院が附設されており、多くの若い僧侶が仏教を学んでいる。2015 年より 14 人もの僧が日本に留学しているとのことであり、日本語が堪能な僧も幾人かいて驚いた。

大明寺には 31 日まで研修させていただき、滞在中には朝課・朝食・昼食・晩課を大明寺の僧侶と共にした。

5 時に起床し、5 時半より大雄宝殿にて朝課が始まる。読誦されるのは楞厳呪や般若心経など普段から馴染みのあるものであり、経本を借りて一心に目で追いながらの随喜であった。太鼓・鐘・磬子などの様々な法器がリズムよく打ち鳴らされ、小気味よい節回しでお経が読誦され、祭りのような躍動感に溢れた勤行である。

40 分ほどの朝課が終わればそのまま斎堂に向かい、朝食の時間になる。鉢が二つ並べられ、一つには粥、一つには中華饅・揚げパン・野菜の和え物等が盛られる。永平寺のそれに比べて量は多い。後で知ったことであるが、住職の能修法師からの指示により、我々日本人禅僧に対する歓迎の意から普段より多めに朝食が振る舞われたとのことであった。

その他の時間には、境内見学・鑑真東渡劇鑑賞・茶話会・声明練習・大雄宝殿の羅漢像磨きなど、様々な体験を通した交流の場があった。特に鑑真学院での声明練習は思い出深い。教壇に立った仁如法師は、高野山大学での留学の経験があり、日本語が非常に流暢な僧の一人である。入学したばかりの僧侶に交じって我々も教場の最前列で参加させてもらった。仁如法師は日本語も交えて高野山の声明の声の出し方や節回し等を指導し、最後には皆で高らかに声明を唱えた。我々日本人僧が日本の高野山声明を、中国の寺院で中国の僧より学ぶというのは、何とも名状しがたい不思議な感覚であった。大明寺には現在「密厳院」という堂舎が建てられており、今後はそこで高野山の真言密教の修行を取り入れていくそうである。

8 月 31 日、大明寺での研修の最終日には、多彩な精進料理が並ぶ中華テーブルを囲んで歓送宴が開かれ、大明寺の僧侶に別れを告げた。

大明寺を発って車で 1 時間ほど南下し、15 時頃、もう一つの研修先である江蘇省鎮江市の金山寺（金山江天禅寺）に到着した。

金山寺は小高い山全体が寺域となっており、いかにも中華風な黄色の壁や赤色の柱の伽藍が山の斜面に所狭しと並んでいる。山頂に聳える八角七重の「慈寿塔」は、境内のどこからでもその姿を望むことができ、鎮江市第一の観光名所として親しまれている。金山寺は禅宗（臨済宗）の寺院であり、中国禅宗の「四大叢林」の一つに数えられ、厳しい坐禅修行で知られているようである。また、日本との関わりも深い。よく知られる金山寺味噌は、日本普化宗の開祖である無本覚心がその製法を金山寺の典座に教わり、日本に伝えたと言われている。日本臨済宗の愚中周及は金山寺の即休契了に学んで帰国し、安芸国（広島県）に仏通寺を開いて衆生を教化した。その縁により、現在では仏通寺が何度も金山寺を訪れ、交流を深めているようである。

金山寺では、4 時半に起床して 5 時より朝課が始まる。内容は前の大明寺とほとんど同じであるが、大雄宝殿の外で諷経が勤められる点が異なる。経本を借りたものの空はまだ薄暗くて経文があまり見えず、終盤近くになってようやく字をはっきり読むことができるほどに明るくなってくる。朝課が終わってそのまま斎堂へ向かい、朝食の時間となる。

坐禅は薬石の後、17 時半より行われる。ここでの坐禅は、私が知る坐禅とは全くの異世界であった。まず経行から始まる。経行は、中央に奉安される毘盧遮那仏像の周りを腕を振って早足で何周も回る。木魚が一打鳴ればピタッと経行を止めて直ちに上牀し、対坐で足を組む。中央の仏像の外、四方の壁伝いに単があるのみであり、坐れば禅堂全体を見渡せて視野は広々としている。25 分ほどして木版が鳴り、下牀して再び経行し、時間になれば木魚が鳴り、上牀して再び 25 分ほど坐る。最後に全員で三拝して坐禅の終わりである。金山寺は臨済宗であるので、坐禅においては公案を工夫して大悟徹底することが求められてる。それ故か、我々が大切にしている正身端坐は、ここではほとんど重視されない。暑ければ、扇子等を使って煽ぐことも許される。こういった坐禅の光景は、私にとって衝撃そのものであった。

その他、木版印刷体験や瑜伽焔口施食の見学等、金山寺でも様々な体験があった。茶話会の時間が多く設けられ、中国仏教の歴史、寺院での作法や制度、勤行での節回し、中国茶のあれこれ等、様々な話を聴き、中国仏教や文化への理解を深めることが出来たように思う。

本尊供養（金山寺）

両国間の仏教交流が語られる中で、よく耳にする言葉がある。それは「山川異域、風月同天（山川は域を異にすれども、風月は天を同じうす)」である。奈良時代、長屋王は千領の袈裟を縫って唐の衆僧に寄進したが、袈裟の縁にはこの語が刺繍されていたと伝えられる。国土・文化・言語は異なれど、持つべき志や歩むべき道は同じだということであろう。大明寺副住職の仁永法師や金山寺住職の心澄法師の話の中でもこの語は幾度も話題にされ、日本と中国との仏教交流が長い歴史の中で常に親密であったことが語られた。

鑑真は「山川異域、風月同天」の話に心を動かされ、日本との仏縁を感じて渡航を決意し、五度の渡航失敗や失明の苦難を受けながらも渡日を果たして戒律制度を伝えた。宋・元代には、日本・中国の多くの禅僧が波濤の中を行き来し、日本に禅を根付かせ、開花させた。これらの因縁によって、幸いにもいま私は禅を学び行じさせていただいている。また、戦乱や廃仏、あるいは文化大革命によってたびたび大打撃を受けてきた中国仏教は、

日本からの支援により復興を遂げている。現在の両国の仏教を比べてみると、伽藍・仏像・法器・進退作法・生活様式・在家信者との関係等、いずれをとってみても歴然とした違いがあるが、その中に、両国が互いに頻繁に交流して築き上げてきた歴史を見出すことができる。現在でも日本仏教の修行や文化を取り入れようとする試みが各地の寺院で行われている。

心澄法師より「隣人が素晴らしければ、宝を持つより良いことだ」（そのような意の古諺があるらしい）という言葉があったが、非常に納得のできる箴言である。現在の日本の仏教がどのような歴史を経て発展してきたかを思い出し、そこから学び、未来へと繋げなければなるまい。互いにそれぞれの良さを学び、助け合い、切磋琢磨してよりよい関係を築きながら、共に手を取り合って仏法興隆に努めることが、今後の我々の課題であろう。「風月同天」の語は、私の心に力強く響いた。

9 月 5 日、最後の朝課・朝食を金山寺の僧侶と共にし、寺を後にした。14 時半頃に上海空港を飛び立ち、関西空港に着いたのは約２時間半後のことである。今回の研修での活動を振り返り、思い出に耽りながらメモ帳にペンを走らせていると、フライトはあっという間に感じた。改めて思う。こんなにも中国が身近であったとは･･･。

日中禅僧交換交流に参加して

瑞泉寺専門道場　五十嵐祖真

今回、私たち雲水 4 人が参加させていただいた日中禅僧交換交流は、8 月 28 日から 9 月 5 日までの 9 日間にわたって行われました。その内、31 日の昼までの約 4 日間を江蘇省揚州市の大明寺様に、残りの日程を鎮江市の金山寺様にお世話になりました。また、それぞれの滞在期間中に、高旻寺様や定慧寺様、隆昌寺様にも訪問させていただきました。

朝は、朝課と斎堂での粥座に参加させていただきました。出頭の際、大雄宝殿では、私たちが普段使うものより遥かに大きな法鼓が鳴らされていました。桴も日本のものに比べて非常に細長く、弾ける様な音が印象的でした。

声明練習（大明寺）

そうして修行僧の方々が集まるといよいよ読経が始まります。読まれているものには楞厳経や般若心経、大悲呪といった普段の朝課で読むお経もありましたが、読み方が中国語であるのに加えて、音程のついた独特の節回しで読まれていました。また、鳴物の種類も多く、魚鱗や大磬の他、半鐘や太鼓なども使われ

ていました。これらの鳴り物に合わせて歌のようにお経が読まれる様子は、まるで音楽や祭りのお囃子を聞いているかのようでした。

最初は、それらの音程を真似ることしかできず、貸していただいた経本を見ていても途中でどこか分からなくなってしまっていました。しかし、何度も聞いているうちに、漢字の読みが共通している箇所や、陀羅尼として同じ音で読まれている箇所などが分かるようになり、最後にはそうした箇所だけでも声を出しながら、最後まで経本を追うことができるようになりました。

日中は、境内の各施設の見学に加えて、書道や中国茶道、木版印刷などの様々な経験をさせていただきました。また、その中で多くの貴重なお話を聞かせていただきました。特に印象的だったのは、金山寺の心澄老師から作法を教えていただく際に伺った、日本と中国の仏教交流についてのお話です。日本にとって中国は仏教の伝来の祖でありますが、その中国では、歴史上で起こった六度もの廃仏運動によって多くの寺院や仏教的資料が失われ、一時は仏教が大きく衰退してしまったのだといいます。しかし、日本に伝わっていた資料を再び中国へ持ち帰ったり、日本僧の訪問を機に寺院が再び整備されたりしたことによって、復興が進んできたそうです。つまり、中国にとっても日本は復興の祖であり、そのため、日中関係の悪化などにも流されず、今日まで盛んな交流が維持されているとのことです。このように、日中がお互いに尊敬し合い、感謝し合うことのできる関係にあるということを知り、私は大変な感動を覚えました。

また、そうした体験中に出会った信者の方々が、私たちに対しても頭を下げて「阿弥陀仏」と挨拶してくださったのも印象的でした。日本では宗教離れが進み、檀家制度や法要、寺巡りなどが形骸化しつつある中、中国の方々が仏教について本当に大切に考えておられることに感銘を受けました。

高旻寺様や金山寺様では、禅堂での坐禅も経験させていただきました。坐禅の流れとしては、私たちが坐禅の間や後で経行を行うのに対して、先に経行をして、その後で坐るというのが一般的であるようでした。これは、日本では坐った後の足の痺れや眠気を取り除くのが目的であるのに対し、中国では坐禅に臨む前に体の調子を整えるのが主な目的であるためのようです。そのため、経行中も腕は組まず、血の巡りをよくするために大きく振って歩くのがよいとされているとのことでした。

また、坐禅中に窓や扉を締め切るのも、私たちとは対照的な点でした。これも、坐禅中に風が入って体が冷え、病気などになるのを避けるという、修行者の健康維持が目的だということでした。確かに冬場の寒風が吹き抜ける禅堂での坐禅を思い返すと、その目的も一理あるように感じます。ただ、まだ夏の暑さが残る中で閉め切られた禅堂は非常に蒸し暑く、坐禅中汗が絶えず流れていました。対照的な風習によって、厳しい時期まで逆転しているのは面白いことだと感じました。

最後に、日中臨黄友好交流協会をはじめ、中国仏教協会ならびに滞在させていただいた

寺院の皆様、そして、共に行動してくださった永平寺、天龍寺の方々に心よりお礼を申し上げます。今回の体験の中で、こうして他国の仏教文化を直に体験し、感じることができる機会は本当に貴重であると感じました。今後とも、この活動が末永く続いていくことを心より願っております。

日中禅僧交換交流を終えて

大本山永平寺　川浦詳元

「是為法事也何惜生命」

是れ法事の為なり。何ぞ生命を惜しまんや。

この言葉を残し鑑真和尚が唐から日本に向け出港したのは、1300 年前のことです。5 回の渡航失敗、失明を乗り越え、6 度目の航海で来日を果たし、日本に戒律制度を伝えました。私たちが最初に訪れた寺院は、鑑真和尚が生まれた地、江蘇省揚州市にある大明寺で、鑑真和尚が住職をされていた律宗の寺院です。江蘇州揚州市は、日本から飛行機と車で 8 時間の所にあります。大明寺の僧侶の方々は、日本の寺院との関わりを持っている方が多く、日本の僧堂安居経験者もいて、特に真言宗の高野山に多くの僧侶を派遣しています。そのような中国の僧侶の方々と話していると自分がいかに他宗派、中国仏教に対して知識が浅いのか思い知ります。今現在の日本の寺院は、世襲がほとんどだと思いますが、中国の僧侶は違います。それぞれが仏教に深い興味を持ち、自らが望んでその道に足を踏み入れています。それだけ学ぶ意欲も大きく感じられ、私は尊敬の念を抱くとともに劣等感を感じました。

大明寺の一日は、5 時に起床し、5 時半から朝課をします。大明寺は、僧堂というものがなく、梵鐘と鼓の音で皆が直接大雄宝殿（仏殿）に集まります。朝課の後は斎堂にて飯台を取り、僧侶は日中の間、寺院内もしくは併設している鑑真学院で各々の役割を熟します。昼食は皆、斎堂で取り、晩課をして、夜は自由時間になるのがほとんどです。鑑真学院に通う学生の方は、日中と夜に講義を受けます。私たちも、入学したての新入生の方々と一緒に高野山の声明練習の講義に参加させていただきました。日本の声明を中国の僧侶の方に教わるというのは、不思議な感じがしましたが、新入生との授業は緊張感もあり、中国の僧侶の方々と一緒の経験をさせていただくことで、とても有意義な交流になったと感じました。

次に滞在させていただいた寺院は、鎮江市にある金山寺です。中国四大叢林の一つで、水陸法要（日本の施食のようなもの）を初めて行った寺院です。現在は、臨済宗の寺院で、僧侶は 20 名ほどいます。一日の流れは、4 時半起床、朝課、小食、日中は、寺院内の各々の仕事を熟し、17 時半より夜坐です。小食、中食、薬石は斎堂で取り、その際の進行・やり方は大明寺と同じでしたが、給仕は信徒（在家）の方がやってくださいました。空いて

いる時間は、中国僧の進退、作法を学んだり、版画体験、水陸法要の見学等をしました。水陸法要は、8 人ほどの僧侶で複数の鳴らし物を使用し、お経もパートごとに読む人が決まっていて音楽劇のようでした。私たちが見学させていただいた法要は 2 時間ほどでしたが、長いもので 6 時間あるそうです。

私が今回の交流体験の中で、中国の僧侶の方は人材育成に尽力していると感じました。一人っ子政策の影響で中国国内でも少子化が問題となっていて、僧侶も年々減少傾向にあり、そういった問題のもと、次世代の僧侶を育成するために仏学院（学校）を増やしたり、より学びやすい環境を作るために全寮制や学費免除等を取り入れています。仏学院では特定の宗派を専門的に学ぶのではなく、他宗派のことを深く学ぶことができます。そのためか中国では、宗派間の隔たりが少なく、他宗派の寺院の住職を務めることがあるそうです。金山寺の住職の心澄法師もその一人で臨済宗の金山寺と曹洞宗の定慧寺を兼務して住職をしています。定慧寺には焦山仏学院が併設されていて、学生たちがより深く学べるように密教の本堂が造られています。心澄法師曰く、「人材不足というのは非常に深刻な問題、人材育成はどんなことよりも最優先課題である」。心澄法師は中国仏教協会副会長を務められていて、日中韓の仏教関係を重視しています。この交流で若い僧侶がお互いのことを学び、両国の利益になるようにと江蘇省での交流を考えて下さいました。

羅漢像磨き（大明寺）

法要の仕方、坐禅の仕方に違いはあっても坐禅中に漂う空気は日本も中国も同じ、貴重な一坐・一炷を行ずることができました。日中の仏教交流を遡れば遣唐使・遣隋使が教えを乞い、鑑真が命を懸けて仏教を伝え、廃仏・文化大革命の折は日本が復旧を支援する、そういった歴史の交流の先に今現在があります。今回の交流に参加できたことは、永平寺というひとつの叢林しか知らない私に多くの刺激を与えてくれました。この経験を多くの日本の僧侶に伝えることで日中交流の発展に協力していきたいと思います。

最後に、この交流を計画・企画してくださった中国仏教協会、日中臨黄友好交流協会の皆様と現地でご迷惑をお掛けした寺院の僧侶の方々、信徒の皆様、貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

第13回日中禅僧交換交流　日程

(2019年8月28日～9月5日)

地域	時間		日程	場所	
	8月28日	14:00～19:00	上海浦東空港より大明寺へ移動		
揚州市		19:00～20:30	歓迎宴	六和居素菜館	
		21:00	就寝	大明寺	維摩楼
	8月29日	5:00	起床	大明寺	維摩楼
		5:30～6:10	朝課		大雄宝殿
		6:10～6:20	朝食		斎堂
		9:00～10:00	日中禅僧交換交流開幕式 1.大明寺副住職仁永法師挨拶 2.揚州市宗教局張氏挨拶 3.日本禅僧代表阪上宗英士挨拶 4.記念品贈呈		鑑真学院 会議室
		10:00～11:00	大明寺見学		各堂
		11:00～11:10	昼食		斎堂
		13:30～14:30	「鑑真東渡劇」鑑賞		臥仏殿
		14:30～15:30	彫刻工房見学		彫刻工房
		16:30～17:00	晩課		大雄宝殿
		17:30～18:30	薬石		五観堂
		18:30～20:00	書道による交流		鑑真学院 教場
		20:30	就寝		維摩楼
	8月30日	5:00	起床	大明寺	維摩楼
		5:30～6:20	朝課(祝聖)		大雄宝殿
		6:20～6:30	朝食		斎堂
		8:30～9:00	大明寺より高旻寺へ移動		
		9:30～11:00	高旻寺見学	高旻寺	各堂
		11:00～11:20	昼食		斎堂
		11:45～12:45	坐禅		禅堂
		14:00～14:30	高旻寺より大明寺へ移動		
		15:00～16:00	茶話会	大明寺	茶室
		16:30～17:00	晩課(日本高野山式)		大雄宝殿
		17:30～18:00	薬石		五観堂
		18:00～19:30	鑑真学院講義参加(日本高野山の声明)	大明寺	鑑真学院 教場
		20:30	就寝		維摩楼

揚州市	8月31日	5:00	起床	大明寺	維摩楼
		5:30～6:10	朝課		大雄宝殿
		6:10～6:20	朝食		斎堂
		8:00～9:00	作務（羅漢像磨き・殿内清掃）		大雄宝殿
		9:00～9:10	本尊供養（日本臨済宗式）		大雄宝殿
		9:30～11:00	鑑真図書館見学		鑑真図書館
		11:00～12:00	歓送宴	料理店	
		14:00～15:00	大明寺より金山寺へ移動		
鎮江市		15:00～16:20	金山寺見学	金山寺	各堂
		16:20～16:30	本尊供養（日本曹洞宗式）		大雄宝殿
		16:30～17:00	住職心澄法師と相見		方丈
		17:00～18:00	薬石	仏印居素菜館	
		20:30	就寝	金山寺	尊宿楼
	9月1日	4:30	起床	金山寺	尊宿楼
		5:00～5:45	朝課		大雄宝殿
		5:45～5:50	朝食		斎堂
		9:00～9:30	江蘇仏学院焦山学院開学典礼参加		講堂
		9:30～11:00	境内散策		各堂
		11:00～12:00	昼食	仏印居素菜館	
		14:00～15:30	中国仏教について（心澄法師より）	金山寺	仏印書画院
		15:30～16:00	坐禅指導		禅堂
		16:20～16:50	写経		微妙吉祥殿
		16:50～17:00	薬石		斎堂
		17:30～18:30	坐禅		禅堂
		20:30	就寝		尊宿楼
	9月2日	4:30	起床	金山寺	尊宿楼
		5:00～5:45	朝課		大雄宝殿
		5:45～5:50	朝食		斎堂
		8:00～8:30	金山寺より焦山定慧寺へ移動		
		8:40～8:50	本尊供養（日本臨済宗式）	定慧寺	大雄宝殿
		8:50～11:00	定慧寺見学		各堂
		11:00～12:00	昼食		斎堂
		12:00～13:00	焦山定慧寺より金山寺へ移動		
		14:00～15:00	木版印刷	金山寺	祖堂
		15:00～16:30	茶話会		留玉閣
		17:00～17:10	薬石		斎堂
		17:30～18:30	坐禅		禅堂
		20:30	就寝		尊宿楼

鎮江市	9月3日	4:30	起床	金山寺	尊宿楼
		5:00～5:45	朝課		大雄宝殿
		5:45～5:50	朝食		斎堂
		8:00～9:00	金山寺より宝華山隆昌寺へ移動		
句容市		9:00～9:10	本尊供養（日本曹洞宗式）	宝華寺	祖堂
		9:10～10:45	隆昌寺見学		各堂
		11:00～12:00	昼食	料理店	
		12:00～13:00	宝華山隆昌寺より金山寺へ移動		
鎮江市		15:00～17:00	茶話会	金山寺	微妙吉祥殿
		17:00～18:00	薬石	仏印居素菜館	
		18:30～19:30	瑜伽焔口施食見学	金山寺	講堂
		20:30	就寝		尊宿楼
	9月4日	4:30	起床	金山寺	尊宿楼
		5:00～5:45	朝課		大雄宝殿
		5:45～5:50	朝食		斎堂
		9:00～11:00	茶話会		微妙吉祥殿
		11:00～11:10	昼食		斎堂
		14:30～16:30	日中禅僧交換交流閉幕式 1.日本禅僧感想 2.金山寺住職心澄法師挨拶 3.中国仏教協会副秘書長普正法師挨拶 4.記念品贈呈		仏印書画院
		17:00～18:30	薬石	仏印居素菜館	
		20:30	就寝	金山寺	尊宿楼
	9月5日	4:30	起床	金山寺	尊宿楼
		5:00～5:45	朝課		大雄宝殿
		5:45～5:50	朝食		斎堂
		6:30～11:00	金山寺より上海浦東空港へ移動		

第 13 回中日禅僧修行体験活動が円満に終了

第 22 回中国・韓国・日本仏教友好交流大会準備会議の決議に基づき、第 13 回中日禅僧修行体験活動は 2019 年 8 月 28 日から 9 月 5 日まで、江蘇省揚州大明寺、鎮江金山江天禅寺で行われた。8 月 28 日、日本臨済宗天龍寺派臨川寺から阪上宗英、臨済宗妙心寺派瑞泉寺から五十嵐祖真、曹洞宗永平寺から和田徹生、川浦詳元ご一行が揚州大明寺に到着、3 日間に及ぶ揚州での修行体験生活が始動した。揚州大明寺は鑑真和尚が住職をつとめた寺院として、中日仏教交流において極めて重要なポジションにある。

日本禅僧ご一行は大明寺の僧侶衆から温かく迎えられた。8 月 29 日午前 9 時、鑑真学院で修行班始業式が催され、揚州市民族宗教局の関係責任者、徐永斌揚州市仏教協会秘書長、大明寺監院仁永法師などが出席、挨拶に立った。

仁永法師はまず大明寺住職の能修法師より日本禅僧への心からの挨拶を伝えられ、大明寺の修行体験活動に日本禅僧が来られたことに対して熱烈な歓迎を表した。そして故・中国仏教協会会長趙樸初居士の著書で指摘された、鑑真和尚が日本に渡った二つの原因―志紹南嶽、愿酬長屋に関する話に触れ、鑑真和尚が中日仏教の友好交流で果たされた重要な役割、および大明寺の日本への留学僧派遣や交流について紹介され、今回の修行体験交流活動を通じて中日友好がさらに増進できればと願った。

阪上宗英さんが日本側禅僧を代表して次のように述べた。「鑑真和尚の故郷である揚州で修行を体験できることを光栄に思い、またご多忙の中を温かく迎えてくださった皆様に心から感謝する。鑑真和尚は日本仏教の発展のためにしっかりした基礎作りをしただけでなく、日本人の生活にも大きな影響をもたらした。今後とも中日両国の仏教界がこのような修行体験活動を実施していくことを希望する」。

揚州滞在中、日本禅僧の皆さんは揚州大明寺の謹厳で規律正しく活気ある叢林生活を体験し、名高い高旻寺という古刹での坐禅風格を教わった。さらに鑑真学院、鑑真図書館を見学し、鑑真学院の教師・学生と書道、梵唄などで交流を深め、「鑑真東渡劇」（歌舞）を鑑賞して、鑑真和尚が弘法（ぐほう）のため遠路はるばる日本に渡航した不惜身命の思いを感じ取り、鑑真精神が新しい時代の中国での伝承・発展を深く会得できた。

8 月 31 日午後、日本禅僧一行が大明寺を後にし、鎮江の金山江天禅寺に出発した。中国仏教協会副会長、江蘇省仏教協会会長、鎮江金山江天禅寺住職である心澄法師が日本禅僧一行と相見され、若い日本禅僧の中国での修行体験を歓迎すると表明し、次のように述べた。「中日両国は一衣帯水の隣国で、仏教往来の歴史が古く、なかでも日本の仏教と江蘇との淵源が深い。特にいま修行体験を終えられた揚州大明寺は鑑真和尚が弘法の道場である。不惜身命の思いに燃え、6 回も渡海した鑑真和尚は、仏法及び中国の優れた文化を日本に伝えた、まさに偉大な人徳者。鎮江も日本の仏教界との法縁は深く、史上数多くの日本僧侶

が勉強に来た地である。臨済宗の僧・愚中周及がかつて金山に修学悟道をし、日本に帰って広島に仏通寺を開創した。日本の『画聖』と称され、世界文化名人トップテンの一人である雪舟禅師も金山で修行した。中日両国仏教界の青年は仏教の友誼を受け継ぎ、法縁を継承する中堅的な力があり、ぜひ今回の修行体験で、趙樸初居士をはじめとする両国仏教界の先達が提唱した中日禅僧修行体験活動の初心と宗旨をしっかり肝に銘じ、努力邁進して学びあい、両国の黄金の絆をさらに強固にし両国友好交流の促進にしかるべく貢献してほしい」。日本禅僧は心澄法師に頂礼し、ご多忙のなかの相見に感謝し、今回の修行体験の機会を大切にしてしっかり修行を体験したい、と表明した。

金山江天禅寺での修行は、朝 4 時半起床、5 時朝課、6 時朝食、午後 17 時半坐禅の毎日。9 月 1 日午後、心澄法師は多忙の中を、仏印書画院で日本の禅僧に金山仏教の礼儀規範について講話をされた。金山道場をより包括的に理解し、金山の修行生活にもっと早く溶けこんでもらうよう、話は中日仏教交流史から説き起こし、中国仏教発展史へと進み、僧服、食事、喫茶、坐禅などにまつわる金山仏教の礼儀規範をじっくり解説された。日常的な修行のほか、日本禅僧は金山江天禅寺で写経、書道、木版印刷など仏教の伝統工芸をも体験し、曹洞道場の焦山定慧寺、江蘇仏学院焦山学院、律宗第一名山寶華山隆昌寺を参拝訪問した。

9 月 4 日午後 2 時半、金山江天禅寺仏印書画院で第 13 回中日禅僧修行体験総括座談会すなわち修業式が行われ、4 人の日本禅僧が自分の修行体験を語られた。臨済宗臨川寺の阪上宗英さんから、中国仏教協会、江蘇省仏教協会および関係寺院に感謝し、9 日間の修行体験を通じて中国の叢林生活を最初に何も知らなかったことから比較的詳しくわかってきたこと、臨済宗の禅僧として中国の禅寺名刹で修行を体験できたことは、なかなか日本ではない体験だったので、この交流活動の継続を願っているというお話があった。

臨済宗瑞泉寺の五十嵐祖真さんは次のように述べた。「まず中国の法師の皆さんに感謝する。はじめての中国なので、来るまではとても落ち着かなかったが、来てから行く先々の寺院から歓迎され、周到なもてなしを受けた。最初の大明寺は、鑑真大和尚のかつての道場だったことや、金山江天禅寺で心澄法師による礼儀規範のお話を伺ったおかげで、実践はしているが呑み込めなかった問題が理解できよかった。日本では、ほかの宗派と交流することはめったにないので、この機会に中国の仏教道場だけでなく、日本の曹洞宗とも十分な交流ができ、この活動の意義深さと影響を痛感し、ずっと続けてほしい。そして、中国僧侶の戒律の厳しいことが分った。みなさん独身で、お金を持たない方もいる。今回学んだ知識と得るところを今後の修行に生かしたいと思う」。

曹洞宗永平寺の和田徹生さんは次のように述べた。「今回は至るところで温かく迎えられ大変ありがたく思う。中国の法師は戒律が厳密で厳格、信徒からの難題を解決するが、日本ではあまり見られないことだ。個人の考えとして、中国に見習うべきではないかと思う。日本は宗派仏教であり、自分の宗派以外のことは殆ど学ぶことはない。しかし、中国では、

八つの宗派を一通り勉強してから、自分の専攻を決めるという。永平寺に 130 人もいる僧侶の中から、自分が選ばれ大変ラッキーだった」。同じく永平寺の川浦詳元さんが特に感銘を受けたのは、法師と信者の関係が親密だったことで、法師に対する信者の尊敬が導師へのそれと同じだった。若い修行僧の私たちが中国の法師から親授と教示を戴けて甚く感動を覚えた、という。

日本禅僧の体験談が終わると、中国仏教協会副会長・金山寺住職の心澄法師が挨拶された。「日本はわたしたちの友好隣国であり、史上、特に唐の時代、中日両国は幅広く交流を行った。まさに『お隣と仲良く付き合えば、これに越したお宝はない』ということだ。両国には戦争があったが、両国交流史から見れば短い期間だった。仏教はインドに生まれ、その後中国に伝来し、さらに中国経由で韓国や日本に伝わった。

中日仏教は互いに助け合い、影響しあってきた。むかし、中国の高僧と日本の遣唐使は中国の仏教文化と文献などを日本に将来し、日本の社会に大きな影響を及ぼしたが、いまや日本仏教界は代々受け継がれた諸宗派の経論などを中国に送りかえしてきたことは、日本仏教の中国に対する貢献でもあると思われる。修行体験はそもそも故・中国仏教協会会長趙樸初居士が提唱されたもので、日・韓両国仏教界から大いに賛同を得られ、中・韓・日友好の『黄金の絆』が築き上げられ、今日まで 20 年あまり続くことができた。
辞が低く向学心に富み、威儀具足で態度も謹厳な 4 人の法師方に、わたしたちが見習うべきところが多い。取り入れあい、理解しあう過程において、木版印刷、梵唄、書道、茶道などについても交流ができた。お国に帰ったら、ここで体験された中国仏教をそのまま紹介してもらいたいし、お互い行き来を盛んにして、友好交流を強め、仏教文化をともに高揚し、両国人民に福祉をもたらす事ができたらよいと思う」。

中国仏教協会副秘書長の普正法師が挨拶のなかで、「中国仏教協会は今回の修行体験交流活動を非常に重視しており、心澄副会長が直接指導と采配に当たり、ご滞在中の生活にも目配りした。今回、数多い中国寺院の中から大明寺、金山江天禅寺、高旻寺などを修行体験道場に選んだのは、二つ理由があった。大明寺に住職をつとめた鑑真和尚は中日両国友好交流のシンボルだったことはもちろん、名高い高僧でもあって、仏教界及び社会各界から尊敬されたこと。さらに、金山江天禅寺や高旻寺は中国禅宗の四大叢林に数えられ、体験するに値すること。さきほど、みなさんのご発言と心澄副会長のご挨拶をお聞きし、修行体験が相互理解、相互学習の重要なツールだと痛感した。いままでの経験を踏まえ、引き続き改善すべき点を改善し，この活動を掘り下げてコンスタントに進めて行きたいと願っている」と強調した。

宗教関係部門のご指導と、中国仏教協会、江蘇省仏教協会の応援を頂いて、第 13 回中日禅僧修行体験活動は円満に終了した。今回の修行体験活動は鑑真和尚の精神を受け継ぎ、日本の若い禅僧が全面的順序よく中国禅宗の「農禅一体」という叢林生活を体験できるようにし、禅宗法脈が中国における伝承と発展を理解し、そして中日仏教の同根同源、法乳

一脈を肌で感じ取ってもらい、両国仏教の友好交流を促進し、双方の「黄金の絆」を強化する上で新鮮な血液を注入でき、喜ばしい成果を上げた。

2019 年 9 月 6 日　中国仏教協会公式ホームページより

（日本語訳：李建華）

発行　日中臨黄友好交流協会事務局
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壷ノ内町８－１　花園大学内
公益財団法人禅文化研究所内
TEL 075-811-5256　FAX 075-811-1432